

論文

## 常陸地域における方形周溝墓の基礎的分析

齊 木 誠

方形周溝墓は弥生時代から古墳時代前期にかけてみられる墓制だが、常陸地域では弥生時代にまでは遡らないことが指摘されている。常陸地域における方形周溝墓の出現と展開に対する研究は1990年代前半以降大きな進展はみられず、また、方形周溝墓の検出例が大幅に増加したにもかかわらず、20年近く集成が行われていない。そのため、本論では常陸地域の方形周溝墓の集成と基礎的要素の分析を行い、方形周溝墓の出現と展開について考察した。その結果、現在の茨城県域で60遺跡176基の周溝墓を確認し、1993年の

集成よりも100基以上増加していることが判明した。方形周溝墓の基礎的要素の分析では、1990年代の研究成果をおよそ追認するかたちとなった。すなわち、常陸地域の方形周溝墓は、古墳時代以降にまず南関東系装飾壺を伴って常陸南部に出現し、その後常陸北部まで展開していく。また、出土土器や墳丘構造、埋葬施設から、常陸南部への波及は下総地域、常陸北部への波及は東海地域及び古墳とのかかりが考えられる。さらに、分布や立地の状況から両者の波及経路が異なることが推定される。

### I. はじめに

方形周溝墓の名称は、1965年に大場磐雄が東京都八王子市宇津木向原遺跡の調査結果にもとづいて命名した。その後、墓制としての研究が進み、現在では弥生時代から古墳時代前期の墓制として認知されるようになった。関東においては、現在の千葉県や埼玉県などで弥生時代中期に遡るものが確認されている。これに対して、常陸地域における出現は古墳時代以降であることが以前から指摘されているが（設楽1987、塩谷1993）、1990年代以降、常陸地域全体を見渡した方形周溝墓の出現と展開に関する研究に大きな進展は見られず、資料の集成も20年近く行われていない。したがって、本論文では常陸地域の方形周溝墓をあらためて集成した上で、その特質を検討する。そして、常陸地域における方形周溝墓の出現と展開について明らかにすることを目的とする。

### II. 常陸地域における方形周溝墓研究史

#### 1. 方形周溝墓研究の流れ

常陸地域における方形周溝墓の検出例は、1964年に常陸太田市の小野崎城址で発見されたものが初例として見られるが、当初は方形周溝墓としての認識を欠くものであった（岡村1977）。

1960年代後半になると、常陸地域の方形周溝墓研究が本格的に行われるようになる。そこでまず論点となったのは、方形周溝墓と古墳の関係性であり、90年代までその議論は続いている。その先駆けとなった茂木雅博は、それまでの方形周溝墓研究をまとめるとともに、東海村須和間遺跡の8・11号墓の土器破砕行為や墳丘の構築法から、当地域の高塚古墳との関係を指摘した（茂木1972）。また、川崎純徳は、方形周溝墓と古墳の出現に時期差があることを指摘し、両者が一定期間併存しながらも、その後は方形周溝墓が古墳へと変質し、古墳時代後期の円墳群へと引き継がれていくと主張した（川崎1972）。その後、村田健一は、方形周溝墓と古墳の出現が同時期であり、古墳発生以前の首長層の未成熟な状態から、古墳の急激な出現によって「前方後方墳」と「方形周溝墓」という階層分化が直接墓制に反映されたとの見方を示した（村田1991）。

次に、80年代後半から90年代前半は、常陸地域における方形周溝墓の集成が進むとともに、それらの出現をめぐる問題について研究が行われた。設楽博己は、常陸地域と下総地域における方形周溝墓についてまとめ、出土土器の系譜関係を手がかりとして、下総台地西北縁地域から常陸南部に方形周溝墓が伝播したと論じた（設楽1987）。塩谷修は、常陸地域における方形周溝墓の集成や各要素の検討と比較を行い、常陸地域における方形周溝墓の波及について、第一波は古墳時代前期古段階に下総地域から南関東系土器を伴って常陸南部に波及し、第二波は古墳時代前期中段階に東海系S字口縁甕の移入と関わりながら常陸北部に波及したと論じた。また、常陸地域全域で弥生時代に遡る方形周溝墓が確認されないことや常陸北部への方形周溝墓の波及が遅れた原因として、東北南部の弥生土器棺墓等の影響を認めている。そして、中段階以降に方形周溝墓の検出数が増加し、規模や立地、集落との関係などの要素で出現期古墳との関係性がうかがえることから、常陸地域に最初に波及した方形周溝墓は共同体の有力者に限られたものであったが、その後造墓階層が拡大するとともに古墳を頂点とする序列化の枠組みに方形周溝墓が組み込まれたと指摘した（塩谷1993）。

90年代後半から2000年代になると、河川流域などの小地域に焦点をあてた方形周溝墓の研究が主体となる。小高五十二は、茨城県北沿岸地域における方形周溝墓の集成と、立地や平面形態などの基本要素についての考察を行った（小高1995）。皆川修は、水戸市十万原遺跡の方形周溝墓の特徴をまとめ、那珂川流域における方形周溝墓の集成と各要素の比較を行った（皆川2001）。また、皆川は方形周溝墓の土器の出土位置や器種構成について整理し、常陸地域における波及期の方形周溝墓に伴う土器は壺を主体としたが、最終的に壺と供献土器のほかに甕といった日常土器が伴うようになることから、出土土器の減少と器種構成の変化が造墓階層の拡大に起因すると指摘した。そして、方形周溝墓に集落を意識した土器の配置がみられることから、方形周溝墓は被葬者の象徴性と威信性を示唆しているとの理解を示した（皆川2003）。稲田義弘は、弥生時代から古墳時代前期の涸沼川流域の集団の様相について検討した。その上で、方形周溝墓に代表される葬送儀礼の伝播が遅れる背景に弥生時代の墓制の影響を指摘した（稲田2007）。

## 2. 本論の目的

常陸地域の方形周溝墓研究において、全域を対象とした方形周溝墓の集成と各要素の検討は、設楽、塩谷のもの以来約20年近く行われていない。近年に至る開発の進行により、方形周溝墓の検出数も大幅に増加している。そのため、方形周溝墓の集成と基本的な要素を再度検討する必要があると考えられる。

本論文では、設楽と塩谷の研究方法を引き継ぎながら、常陸地域における方形周溝墓の集成を行い、方形周溝墓をめぐる各要素の基礎的分析を行う。そして、常陸地域における方形周溝墓の出現とその展開過程について解明することを目的とする。具体的には、時期と分布、形態と規模、墓群構成、土器の系譜と器種構成、集落との関係、他の墓制との関係といった方形周溝墓の各要素について再検討し、常陸地域における方形周溝墓の出現や特質について考察を行うこととする。

## Ⅲ. 方形周溝墓の検討

### 1. 方形周溝墓の集成

本研究では、常陸地域にほぼ相当する茨城県内の資料を集成した。分析対象とする遺構は、方形周溝墓、円形周溝墓とされる方形もしくは円形に溝が巡る遺構とする<sup>1)</sup>。

以上の方針にしたがって各報告書をもとに集成を試みた結果、60遺跡で176基の周溝墓を確認した(第1表)。

### 2. 時期と分布

方形周溝墓の所属時期については、出土土器の編年的位置付け<sup>2)</sup>にもとづいて決定した<sup>3)</sup>。その結果、弥生時代に遡ると考えられる方形周溝墓は確認されなかった。以下、方形周溝墓の造所属時期を3期に区分した上で分布のあり方を整理するが、いずれも古墳時代前期の範疇に含まれるものである。

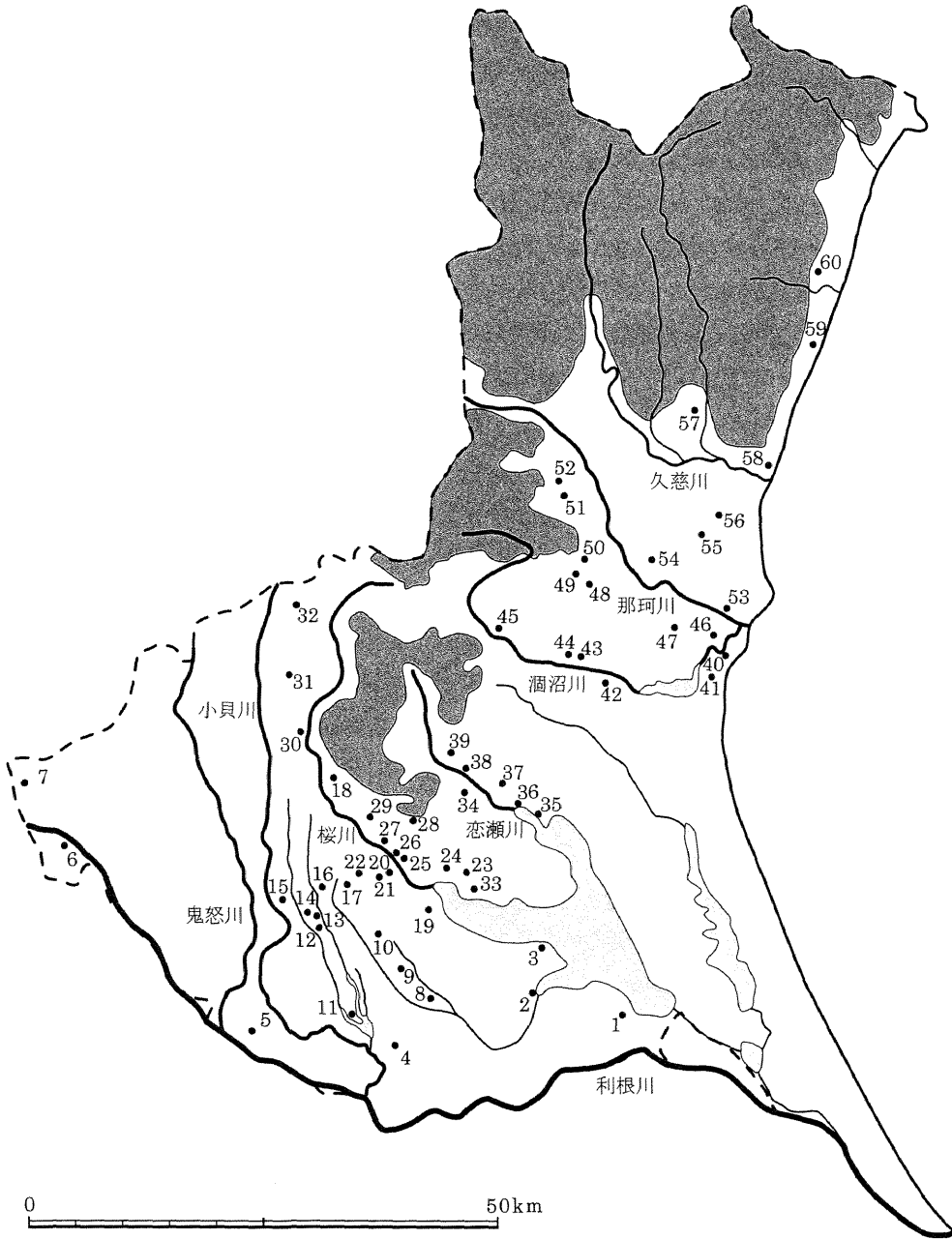
1期 比田井Ⅰ段階新相(後)、廻間Ⅱ式4段階～Ⅲ式1段階、草刈Ⅱ期(前)併行

2期 比田井Ⅱ段階、廻間Ⅲ式2～4段階、草刈Ⅱ期(後)併行

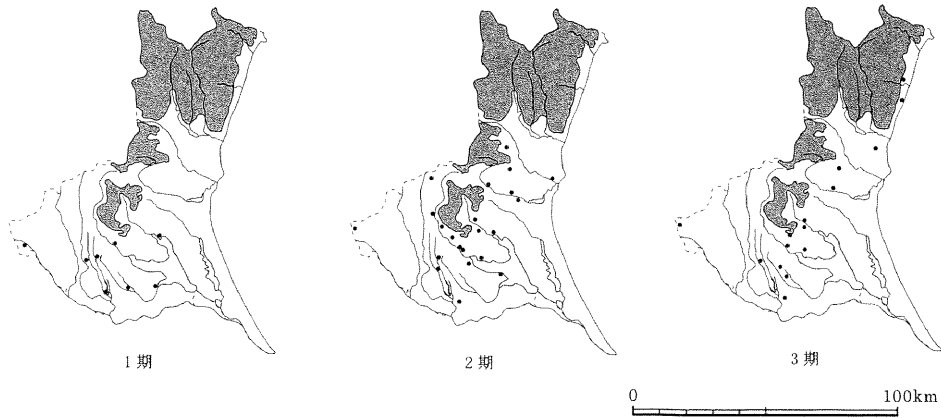
3期 比田井Ⅲ段階、松河戸Ⅰ式、草刈Ⅲ期併行

1期は、弥生土器の系譜を引く装飾壺や口縁部に輪積み痕やキザミ目が施される甕が残存する時期である。高坏は脚部がハの字状に開脚するものが主流になり、小型器台なども含まれる。この時期に該当するものは9基が認められる。代表例として、奥原2号墓、面野井2号墓<sup>4)</sup>、泊崎城址方形周溝墓などが挙げられる。これらは、いずれも南関東系装飾壺が出土している。また、権現平2号墳では東海西部系装飾壺が3点出土し、高須賀熊の山遺跡では口縁部に輪積み痕が残る甕が出土している。

2期は、これまでの装飾壺や輪積み痕・キザミ目が施される甕が消滅し、小型丸底埴が出現する時期である。壺は口縁部の棒状浮文やキザミ目のみが残存する。また、常陸北部ではS字



第1図 常陸地域における方形周溝墓の分布  
(番号は第1表の遺跡番号と同一) (S=1/1,000,000)



第2図 方形周溝墓の時期別分布

口縁甕が出現する。この時期に該当するものは28基が認められる。代表例として、面野井13号墳、新善光寺1号墓、十万原1号墓などが挙げられる。

3期は、これまでのハの字状に開脚する高坏が消滅し、柱状脚高坏が出現する時期である。この時期のものは27基が認められる。代表例として、後生車2号墳、須和間11号墓などが挙げられる。

方形周溝墓の分布については、南は利根川流域から北は十王川流域まで広範囲に認められる(第1図)。しかし、北浦沿岸では未だに確認されていない。分布を時期別にみると(第2図)、1期の方形周溝墓は常陸南部にのみ分布し、とくに霞ヶ浦や牛久沼の沿岸と、それらの湖沼に注ぎ込む桜川や谷田川といった河川流域に集中する。これらの地域はいわゆる「香取海」<sup>9)</sup>の沿岸部にあたり、これに注ぐ河川流域に1期の方形周溝墓が造営されたと考えられる。

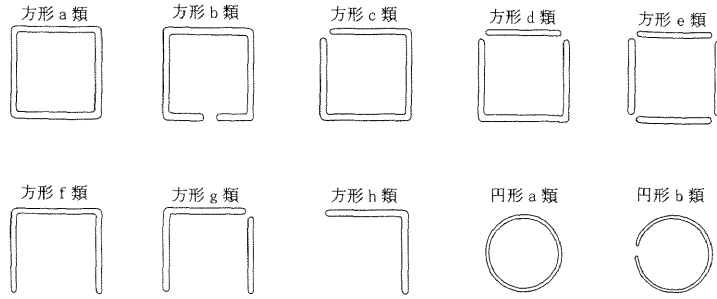
2期の方形周溝墓は、それまで常陸南部に集中していたものが那珂川流域まで分布域を拡大する。また、常陸南部では、それまでの香取海沿岸やそれに注ぎ込む河川の河口付近から、河川のやや上流側に分布するようになる。

3期の方形周溝墓は、常陸北部において、久慈川以北の太平洋沿岸まで分布域を拡大する。なお、立地の面からみると、1期から3期を通して方形周溝墓は河川に面した台地上に造営される傾向がみられる。

### 3. 形態と規模

常陸地域の方形周溝墓及び円形周溝墓の形態は、以下の10種類である<sup>6)</sup>(第3図)。

- 方形a類 方形の周溝が全周するもの。
- 方形b類 方形の周溝で一辺の中央部が途切れるもの。
- 方形c類 方形の周溝でコーナー1ヶ所が途切れるもの。



第 3 図 周溝墓の形態分類

方形 d 類 方形の周溝で一辺の両コーナーが途切れるもの。

方形 e 類 方形の周溝で四隅がすべて途切れるもの。

方形 f 類 コの字型の周溝をもつもの。

方形 g 類 コの字型の周溝でコーナー 1 か所が途切れるもの。

方形 h 類 L 字型の周溝をもつもの。

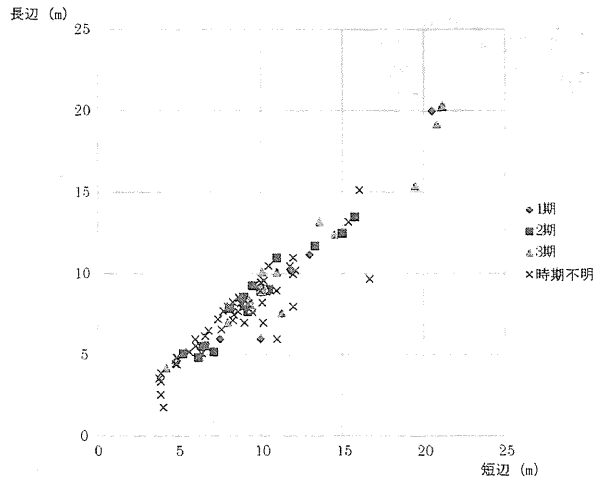
円形 a 類 円形の周溝が全周するもの。

円形 b 類 円形の周溝で 1 か所が途切れるもの。

方形 a 類は、常陸地域の方形周溝墓に多くみられる形態である。これは、古墳時代前期に広く認められる方形周溝墓の形態と一致している。方形 b 類は、山川 22 号墳に認められる。方形 c 類は、山川 13 号墳や赤塚 27 号墓など 4 基が認められる。方形 d 類は、源台 5 号墓など 2 基が認められる。方形 e 類は、弥生時代に多くみられる形態であり、常陸地域では中畑 1 号墓が該当する。しかし、出土土器は 2 期に位置づけられることから、古墳時代以降のものと考えられる。古墳時代以降の方形 e 類は甲府盆地に存在することが知られており（中山 1991）、埼玉県坂戸市広面遺跡においても同様のものが確認されている（財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990）。方形 f 類は、山川 32 号墳と髭釜 2 号墓に認められる。ただし、山川 32 号墳は両側の二辺が極端に短い。方形 g 類は、堂東 5 号墓のみに認められる。方形 f 類に類似することから、その派生形態とも考えられる。方形 h 類は、髭釜 1 号墓に認められる。円形のものには 15 基が認められる。そのうち 8 基が円形 a 類であり、円形 b 類は源台 3 号墓のみである。

以上のように、常陸地域の方形周溝墓はすべての時期を通して方形 a 類が主流である。1 期は方形の形態のみが認められ、2 期以降は方形のものとともに円形のものが出現する。したがって、方形周溝墓に一步遅れて円形周溝墓が出現したと考えられる<sup>7)</sup>。

方形周溝墓の規模については、周溝内法の長辺と短辺の長さの比較を行った<sup>8)</sup>（第 4 図）。その結果、5m から 10m の間に規模が集中する傾向がみて取れた。さらに、10m 以下のものは正方形に近い形態を示している一方、10m 以上になると基数が減少し、長方形のものもみられる傾向にある。長辺が 20m 前後になるものは 4 基しか確認されず、時期は 1 期の権現平 2 号墳を除いてすべて 3 期である。この規模の方形周溝墓は、常陸地域における出現期の前方後方



第4図 方形周溝墓の規模

墳の後方部とほぼ同規模であり、古墳との階層性について指摘されている（塩谷 1993）。時期別に比較すると、1期のは規模が分散しており、規模において特定の傾向は認められない。2・3期は10m前後に規模が集中していることから、この規模が方形周溝墓造営の目安と考えられ、方形周溝墓は一定の規格性をもって造営されていたことが想定される。

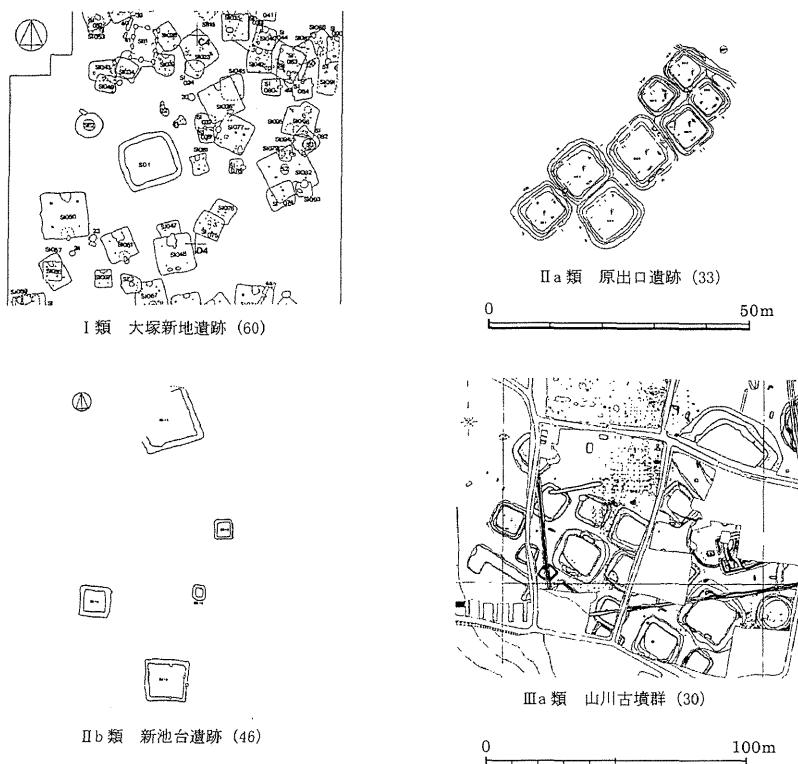
#### 4. 墓群構成

墓群構成は、基数と存在形態から以下のように分類される<sup>9)</sup>（第5図）。

- I類 単独のもの。
- II類 2基～10基ほど群集するもの。
- III類 10基以上群集するもの。
- a類 周溝墓が隣接して存在するもの。
- b類 周溝墓が分散して存在するもの。

I類は9遺跡で確認できる。時期はすべて2期以降であり、形態もすべて方形a類で、規模は10m前後に集中する。壺杯清水西遺跡のみ集落外に方形周溝墓が位置し、ほかはすべて集落内に位置する。その中でも集落の端に方形周溝墓が造営されるもの、住居に囲まれて造営されるものといったように、占地に違いがみられる。

II a類は23遺跡で確認される。常陸地域の周溝墓群において最も多くみられる構成であり、1期から3期にかけて全般的に認められる。原出口遺跡や廻り地A遺跡、後九郎兵衛遺跡のみ周溝の共有もしくは重複が認められるが、大半の遺跡で隣接する方形周溝墓の周溝は重複していない。また、周溝墓群の中に1基のみ規模の大きいものがみられる。これらは出土土器の時期から短期間のうちに造営された様子もうかがえる。



第5図 方形周溝墓の墓群構成 (カッコ内は資料文献番号)

(I類・II a類：S=1/1,500, II b類・III a類：S=1/3,000)

II b類は6遺跡で確認される。時期については不明なものが多い。奥原遺跡や新池台遺跡、向井原遺跡では方形周溝墓どうしが間隔をとりながら主軸をほぼ揃えて立地している。このような立地状況は、周溝墓が形成される過程において造営が途絶した結果生じたものとも考えられる。

III a類は3遺跡で確認できる。それぞれの遺跡で主軸方向の違いからいくつかのグループがみられる。山川古墳群では周辺にいくつかの同時期集落がみられることから、複数の集落共同体によって周溝墓群が造営されていた可能性がある。

なお、方形周溝墓群の中に円形周溝墓がみられる遺跡は5遺跡で認められる。II a類の面野井古墳群と志筑遺跡では、それぞれ方形周溝墓群と円形周溝墓が若干の距離をおいて営まれている。III a類の墓群構成では、方形周溝墓群の中に円形周溝墓がみられる一方で、これら周溝墓群とは距離を置いて古墳時代中期以降の円墳が存在している。こうしたあり方は、千葉県草刈遺跡における周溝墓群の構成と類似していることから（財団法人千葉県文化財センター2000）、常陸地域のこれらの遺跡も、墳丘形態が方形から円形に移り変わる過渡期のものとしてとらえることができよう。



## 5. 土器の器種構成と系譜

方形周溝墓から出土した土器には、時期ごとに器種構成の違いがあることが指摘されている(塩谷 1993, 皆川 2003)。ここでは、周溝全体が発掘されている方形周溝墓を対象として、出土土器の器種構成について検討する。

1期に属する奥原2・3号墓、権現平2号墳では、壺主体の器種構成が認められる。奥原2号墓と権現平2号墳では壺が10点以上出土し、大型の装飾壺が複数認められるとともに二重口縁壺も確認されている。奥原2号墓においては、壺9点に焼成後底部穿孔が認められる。

2期に属する山川28号墳、中畑1号墓、十万原1号墓、大塚新地1号墓、三反田下高井3・4号墓では、壺の出土が限られる一方で、高坏、器台といった器種の増加がみられる。この時期は壺の底部穿孔もあまりみられなくなる。また、多くの遺構で出土土器の個体数が5点前後になる。ただし、十万原1号墓では土器が37点出土している。

3期に属する源臺4号墓、実穀寺子1・2号墓、原出口2～4号墓、壺杯清水西1号墓、志筑方墳1号、後生車2号墓と2号墳では、壺がさらに減少する傾向がみられ、壺が全く含まれないものも現れる。壺の底部穿孔は、原出口2・4号墓において焼成前のものが認められる。また、高坏や器台も2期に比べ数が減少し、土器全体の個体数も減少する。

以上に述べたように、1期では壺を主体とした土器の大量供献が認められる。その中には南関東系、東海西部系の装飾壺が含まれる。2期以降は高坏、器台が若干増加する一方、全体的に土器の出土数が減少し、土器供献に対する意識の希薄化が進む。十万原1号墓のように土器の大量供献という前段階の意識を引き継いでいるものもあるが、壺ではなく甕が主体であることや、高坏が大量に出土することなど、以前には認められない傾向がうかがえる。3期は、高坏などの出土数も減少し、土器供献に対する意識がさらに低下する。

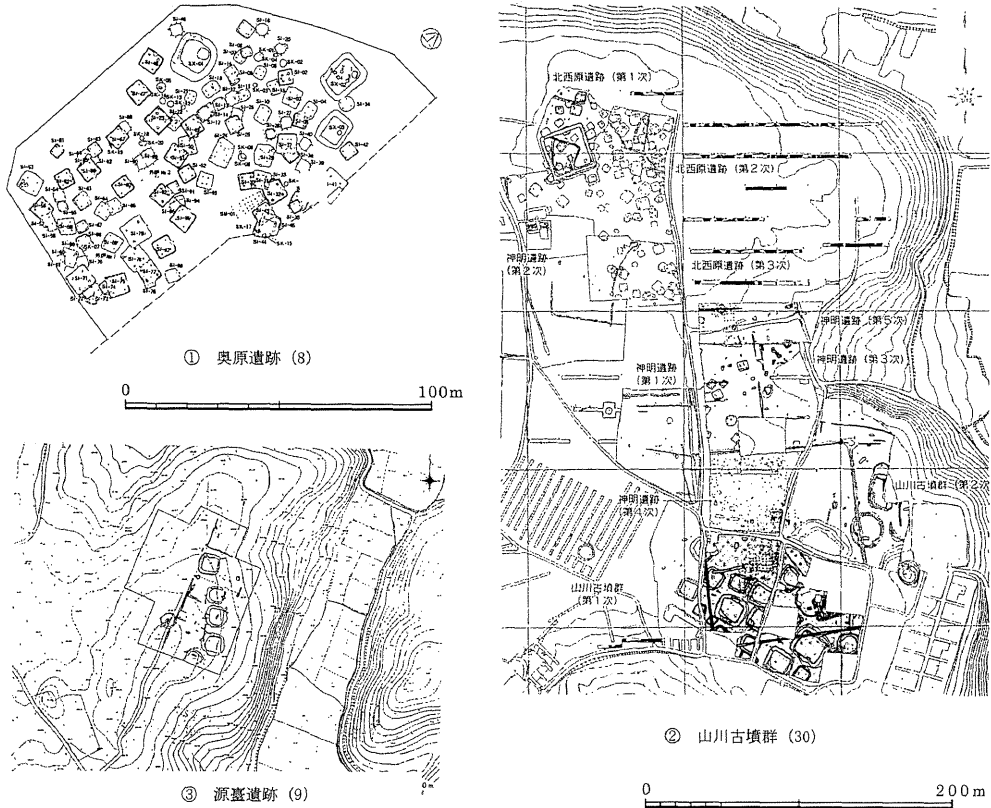
出土土器の系譜については、常陸南部の方形周溝墓で多くみうけられる南関東系の装飾壺が大きな特徴として挙げられる。それらについては、下総台地西北縁地域との共通性が指摘されている(設楽 1987)。また、高須賀熊の山遺跡や上坂田北部貝塚では、口縁に輪積み痕を残す甕が出土しており、印旛、手賀沼周辺との関係がうかがえる。

また、集落においては、在地の十王台式土器と古式土師器の共存が指摘されているが(弥生時代研究班 1994)、方形周溝墓においては両者の共存は確認されていない<sup>10)</sup>。常陸地域ではこうした土器系譜による区別が明確に認められることから、方形周溝墓が外来的な性質を有していたことが想定できる。

## 6. 集落との関係

方形周溝墓と集落の関係については以下のような分類が可能である<sup>11)</sup>(第6図)。

- ① 墓群が集落内に存在する。
- ② 墓群が集落と隣接して存在する。
- ③ 墓群が集落と隔絶して存在する。



第6図 集落と方形周溝墓群（カッコ内は資料文献番号）  
 (①：S=1/2,500, ②・③：S=1/5,000)

①は18遺跡に認められる。所属時期は1期から3期までみられ、墓群構成もI類からII類まで認められることから、常陸地域では普遍的な方形周溝墓のあり方であったと考えられる。ただし、詳細にみると、方形周溝墓が同時期の住居に囲まれて存在するものと、集落の端に存在するものがある。

②は4遺跡に認められる。これらの遺跡では、遺構の空白域を挟んで集落と墓域が明確に区別されており、基数の多い周溝墓群がこのようなあり方をしている。山川古墳群のようなⅢa類の大規模な周溝墓群は、共通して台地の先端に集中する傾向がみられる。

③は13遺跡に認められる。これらについては、立地環境が古墳と酷似していると指摘されている（塩谷1993）。所属時期は、面野井古墳群と権現平古墳群を除いて3期のものがほとんどである。墓群形態は大半がII類であり、新池台遺跡以外の方形周溝墓群は接続している。これらの遺跡には、豊富な玉類が出土した面野井2号墓、東海系の装飾壺などが出土した権現平

2号墳、割竹形木棺と埋葬施設上での土器破碎行為から高塚古墳との関係が指摘されている須和間遺跡（茂木1972）、墳丘構築法から古墳の影響が考えられる後生車2号墳<sup>12)</sup>（伊東1987）といった、ほかの方形周溝墓にはみられない特徴を有したものが多くみうけられ、被葬者の性格の違いが想定される。

以上でみたような集落との関係は、墓域に対する捉え方の違いから生じたものであると考えられる。①は集落内に墓があることから、集落と墓域の区別があいまいであったか、集落を意識して周溝墓が造られたことが想定される。後者については、十万原1号墓で集落に面した位置に土器を配置していたとの指摘がある（皆川2003）。

②は集落と墓域を区別している存在形態である。これらは単独もしくは複数の共同体によって営まれた共同墓地であった可能性がある。

③は集落と墓域が切り離されている存在形態である。とくにこの場合は、方形周溝墓の個々の要素においても他と一線を画しており、①、②とは異なる背景のもとに造営されたものと想定される。その背景として、塩谷が立地の共通性から高塚古墳の影響を指摘している（塩谷1993）。

また、弥生時代後期の集落において、十王台式土器や上稲吉式土器といった在地系弥生土器とともに南関東系弥生土器が出土する集落は、常陸南部に偏在することが指摘されている（弥生時代研究班1994）。こうしたことから、もともと南関東の影響を受けていた地域に、最初に方形周溝墓が出現したものと想定される。また、常陸北部の集落において、S字口縁甕が頻繁に出土することから、方形周溝墓の展開にも東海からの影響があったと考えられる。

## 7. 他の墓制との関係

常陸地域の方形周溝墓と古墳の関係について塩谷は、常陸南部の方形周溝墓が古墳よりも一足先に出現し、常陸北部ではS字口縁甕の波及とともに方形周溝墓と古墳が同時に出現するとした（塩谷1993）。出土土器の時期から考えると、方形周溝墓が先に出現し、古墳がそのあとに出現するとの理解には妥当性がある。

また、須和間遺跡の立地、同11号墓の割竹形木棺と埋葬施設上の土器破碎行為、後生車2号墳の墳丘構築法には、古墳からの影響が読み取れる。そのような見方に立つと、須和間11号墓の勾玉のみの貧弱な副葬品は、古墳との階層差を表しているものと考えられる。また、20m規模の大型方形周溝墓が3期に多くみられることも方形周溝墓が古墳の影響を受けて造営されていたことを示すものであろう。

その一方で、北条中台64号墳や山川8号墳では周溝内埋葬に土器棺が使用されており、伝統的な墓制との関連もうかがえる。

## IV. 考 察

### 1. 方形周溝墓の出現

以前より、常陸地域においては弥生時代に方形周溝墓は出現せず、古墳時代に入ってから常陸南部に最初に波及するものと考えられている（設楽 1987, 塩谷 1993）。この地域では弥生時代後期に南関東系土器の流入がみられることから、常陸地域における方形周溝墓の出現以前に常陸南部と下総地域にはすでに交流関係があり、そうした前史が下総地域からの方形周溝墓波及の土台になったと考えられる。その際、方形周溝墓は南関東系装飾壺を伴って波及したものとみられる。常陸地域に波及してきたこれらの方形周溝墓は方形 a 類が主流になっている。下総地域においては、弥生時代後期までみられていた方形 e 類が減少し、古墳時代に入ると方形 a 類が出現、増加する傾向がみられる（諸墨・山岸 1996）。こうした下総地域に同調するかたちで、方形 a 類が波及したのと考えられる。

### 2. 方形周溝墓の展開

常陸北部まで方形周溝墓が展開するのは 2 期以降と考えられる。それは、常陸北部が在地の文化を根強くもつ地域であったからであろう（塩谷 1985・1993）。一方、2 期は常陸地域に高塚古墳が出現する時期とみられるほか、小型丸底埴が常陸地域に登場する時期である。こうした変化に連動して方形周溝墓が常陸北部まで展開したのではないだろうか。その波及経路としては、海上交通を利用して太平洋沿岸から那珂川などの河川に入るルートが考えられる。なぜなら、霞ヶ浦に流れ込む恋瀬川流域と、太平洋に注ぐ那珂川流域の間に、分布の空白域が認められるからである（第 1 図）。また、常陸北部は S 字口縁甕 D 類<sup>13)</sup>の影響が指摘される地域であり、海上交通によってもたらされた可能性が指摘されている（古墳時代研究班（集落グループ）1998）。したがって、常陸北部においては海上交通を利用して S 字口縁甕、高塚古墳とともに方形周溝墓が波及していったと考えられる。さらに、3 期になると、20m を超える規模のものや、須和間 11 号墓、後生車 2 号墳のように高塚古墳の影響を受けたものが現れ、古墳を造営する集団と方形周溝墓を造営する集団の密接な関わり合いがみてとれるようになる。

### 3. 常陸地域における方形周溝墓の特質

最後に、これまでの分析結果をふまえ、常陸地域における方形周溝墓の特質についての現段階での理解を示しておきたい。それは、以下の 4 点にまとめられる。

第一に、常陸地域の方形周溝墓は古墳時代以降に出現することである。下総で弥生時代中期に方形周溝墓が出現する一方で、常陸地域において方形周溝墓がみられない理由として、それまでの弥生時代社会の影響が考えられる。

第二に、常陸地域の方形周溝墓は方形 a 類が主流ということである。これには、常陸地域への波及時期と下総における方形 a 類の増加が影響しているものと考えられる。

第三に、1 期と 2 期の波及ルートが異なることである。1 期は香取海を介した水上交通によっ

て方形周溝墓が常陸南部にもたらされた。これに対して2期以降では、太平洋沿岸からの海上交通によって常陸北部に方形周溝墓が波及したものと想定される。

第四に、方形周溝墓の中には、古墳の影響を受けたものがみられることである。規模の面からみると、20mほどの規模の方形周溝墓は、常陸地域や下総地域における前方後方墳の後方部の規模に匹敵しており、これらとの関係で営まれたものと考えられる。また、墓群構成や集落との関係を踏まえても、とくに3期では、集落とは隔絶した場所に墓域が営まれるものが多い傾向がみられ、古墳の影響が考えられる。

## V. おわりに

本論では、常陸地域の方形周溝墓の各要素について検討し、その出現と展開および特質について述べてきた。各要素については方形周溝墓の事例が増加した今日でもなお、設楽博己や塩谷修の指摘の多くが通用することが確認でき、本論においても両者の指摘を追認する部分が多くなったことは否めない。今回の基礎的分析を踏まえ、今後は常陸地域のみではなく、周辺地域を加えたより広い範囲を対象とした考察を進めることを課題としたい。

## 謝辞

本論文は、平成26年度に筑波大学人文・文化学群人文学類に提出した卒業論文を加筆、修正したものである。本稿の執筆にあたり、指導教員である滝沢誠先生には多大なるご指導とご教示をいただいた。さらに、筑波大学考古学研究室の諸氏には、執筆作業の過程で多大なるご協力を賜った。

本論に関わる資料調査に際しては、以下の諸氏、諸機関にご指導、ご協力をいただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げたい。

塩谷 修、田中 裕、前島直人、財団法人茨城県教育財団、土浦市立上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館、つくば市教育委員会文化財課、流山市立博物館（敬称略）

## 註

- 1) 時期を決定する遺物が出土していないものであっても、群集形態や溝の状況から周溝墓と考えられるものは分析対象に含めた。その中には古墳時代前期の方墳、円墳とされるものも含まれている可能性があるが、今回はすべて方形周溝墓、円形周溝墓として取り扱うこととした。また、今回取り上げた遺構の名称は、各報告書の記載にもとづく。
- 2) 土器編年については、常陸北部においてはS字口縁壺による編年が構築されているが（古墳時代研究班（集落グループ）1998）、常陸南部の編年が未確立であることや、設楽と塩谷が以前に方形周溝墓出土土器について下総地域との関係性を指摘していることから（設楽1987、塩谷1993）、今回は南関東の土器編年を参考にした。具体的には、比田井編年（比田井2001）、草刈編年（財団法人千葉県文化財センター2000）、君津編年（小沢・諸墨1996）を参照し、二重口縁壺に関しては古屋編年（古屋1998）を参照した。また、出土土器が皆無のものや、時期を判断する根拠に乏しいものについては時期不明とした。

- 3) 出土土器は方形周溝墓の造営以後に祭祀で用いられた可能性もあるため、出土土器のみによって方形周溝墓の年代を決定することには慎重を期したい。
- 4) 面野井古墳群2号墓は南関東系装飾壺とともに小型丸底埴が出土している。今回は時期を1期としたが、2期になる可能性も否定できない。つまり、小型丸底埴出現時期まで装飾壺が残存し、南関東とは器種構成を異にする可能性がある。
- 5) 現在の霞ヶ浦、北浦、牛久沼、印旛沼、手賀沼一帯は、古代にはひと続きの大きな内海であったとされている（千葉県立中央博物館歴史学研究所1993）。本論では、この内海を「香取海」と呼称する。
- 6) 方形周溝墓の調査において、調査区の関係から一部の発掘にとどまっているものや、後世の削平によって周溝の残存状況が良くないものも存在する。そういった現状もふまえ、できるだけ遺構全体が調査されているものについて検討を行った。そのため、この形態以外のものが存在していた可能性も否定できない。
- 7) 円形周溝墓の中には出土遺物が少なく時期が不明確なものが多いため、2期より遡るものがある可能性も否定できない。
- 8) 対象とする遺構は、発掘調査によって規模が確定しているものに限定した。
- 9) 方形周溝墓の調査は限定的な範囲にとどまるものも多く、墓群全域が調査されていない遺跡もみうけられる。したがって、発掘調査で判明した内容と本来のあり方は異なる可能性がある。
- 10) 楯の台古墳群の方形周溝墓では、在地系弥生土器が出土している。
- 11) 集落すべてが調査されているケースは稀であり、大半が一部または部分的な発掘調査にとどまっている。そのため、今回の方形周溝墓と集落の関係についての検討が実態とは整合しない恐れもある。しかし、一定の見通しを立てることは可能であると考え、今回は比較的広範囲の発掘調査が実施された遺跡を対象として分類を行った。
- 12) 伊東重敏は、後生車2号墳の墳丘築造法として、墳丘予定地を削り出すように周囲を掘りくほめ、その土を3回にわたって平坦面を作るように積み上げる、「フラット工法」あるいは「三段築造法」が用いられていると指摘している（伊東1987）。
- 13) 赤塚次郎はS字状口縁甕をO類、A類、B類、C類、D類の5つに区分しており、D類はこの中で最も新しい形態としている（赤塚1990）。比田井克仁は比田井編年Ⅱ段階においてS字状口縁甕D類が関東で登場すると指摘している（比田井2001）。本論文では2期を常陸地域におけるS字状口縁甕の登場する時期と想定した。

#### 参考文献

- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター。
- 伊東重敏 1987 『後生車古墳群発掘調査報告書（第2次）』石岡市教育委員会。
- 稲田義弘 2007 「新善光寺跡に方形周溝墓が造られる頃」『考古学の深層：瓦吹堅先生還暦記念論文集』瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会 185-194頁。
- 岡村和子 1977 「d.千葉県 g.茨城県（東関東地方）」『原史墓制研究』5 原史墓制研究会 59-76頁。
- 小沢 洋・諸墨知義 1996 「君津地方における弥生後期～古墳前期の土器編年」『共同研究 君津地方における弥生後期～古墳前期の諸様相 君津郡市文化財センター研究紀要』7 君津郡市文化財センター 4-29頁。
- 小高五十二 1995 「北部沿岸地域の方形周溝墓」『研究ノート』4号 財団法人茨城県教育財団 99-113頁。
- 川崎純徳 1972 「古墳以前一常総地方における古墳成立基盤について考える一」『常総台地』第6号 常総台地研究会 14-23頁。

- 古墳時代研究班（集落グループ） 1998 「茨城の「S字状口縁台付甕」について（3）」『研究ノート』7号  
財団法人茨城県教育財団 45-56頁.
- 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1990 『広面遺跡』.
- 財団法人千葉県文化財センター 2000 『研究紀要』21.
- 塩谷 修 1985 「茨城県地方における方形周溝墓の出現とその性格」『史学研究集録』10号 国学院大学  
史学大学院会 40-60頁.
- 1993 「茨城の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』同成社 121-136頁.
- 設楽博己 1987 「常陸地方における方形周溝墓をめぐって」『比較考古学試論』雄山閣出版 191-238頁.
- 千葉県立中央博物館歴史学研究科 1993 「「香取の海」について」『香取の海—その歴史と文化—』千葉県  
立中央博物館 59頁.
- 中山誠二 1991 「甲斐の方形周溝墓と前期古墳」『シンポジウム 西相模の三・四世紀 一方周溝墓をめぐって—』東海大学文学部 119-132頁.
- 比田井克仁 2001 『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版.
- 古屋紀之 1998 「墳墓における土器配置の系譜と意義—東日本の古墳時代の開始—」『駿台史学』第104  
号 駿台史学会 31-82頁.
- 皆川 修 2001 「十万原遺跡の方形周溝墓について」『研究ノート』10号 財団法人茨城県教育財団 99-  
106頁.
- 2003 「茨城の方形周溝墓の一考察」『領域の研究：阿久津久先生還暦記念論集』阿久津久先生  
還暦記念事業実行委員会 217-226頁.
- 村田健一 1991 「関東地方東部における古墳出現期の様相Ⅰ」『研究紀要』8 財団法人埼玉県埋蔵文化財  
調査事業団 37-64頁.
- 茂木雅博 1972 『常陸須和間遺跡』雄山閣出版.
- 諸墨知義・山岸良二 1996 「千葉県の方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』同成社 75-96頁.
- 弥生時代研究班 1994 「茨城県後期弥生式土器編年の検討（Ⅲ）十王台式土器について」『研究ノート』3号  
財団法人茨城県教育財団 17-31頁.

資料文献（番号は第1表と対応）

- 1 財団法人茨城県教育財団 1988 『尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡』.
- 2 楯の台古墳群発掘調査委員会 1986 『楯の台古墳群発掘調査報告書』.
- 3 陸平調査団 1996 『根本遺跡』.
- 4 財団法人茨城県教育財団 1982 『廻り地A遺跡（上）』.
- 5 財団法人茨城県教育財団 1981 『茨城県教育財団文化財調査報告Ⅷ』.
- 6 財団法人茨城県教育財団 2008 『清水遺跡 同所新田遺跡』.
- 7 財団法人茨城県教育財団 1998 『大橋B遺跡・釈迦才仏遺跡』.
- 8 奥原遺跡発掘調査委員会 1989 『奥原遺跡発掘調査報告書』.
- 9 牛久市教育委員会・源臺遺跡発掘調査委員会 1989 『常陸地域源臺遺跡』.
- 10 財団法人茨城県教育財団 1999 『実穀古墳群・実穀寺子遺跡1』.
- 11 荃崎村教育委員会 1980 『泊崎城址』.
- 12 財団法人茨城県教育財団 1987 『境松遺跡』.
- 13 財団法人茨城県教育財団 2002 『鳥名前野東遺跡 鳥名境松遺跡 谷田部漆遺跡』.
- 14 財団法人茨城県教育財団 2003 『鳥名ツバタ遺跡』.

- 15 つくば市教育委員会 2000 『つくば市内遺跡—平成 11 年度発掘調査報告—』.
- 16 つくば市教育委員会 2012 『つくば市内遺跡—平成 23 年度発掘調査報告—』.
- 17 財団法人茨城県教育財団 2014 『面野井古墳群』.
- 18 財団法人茨城県教育財団 2000 『六十目遺跡』.
- 19 財団法人茨城県教育財団 1995 『中台遺跡』.
- 20 財団法人茨城県教育財団 2013 『五蔵遺跡』.
- 21 土浦市遺跡調査会 1987 『般若寺遺跡跡(西屋敷地内)・竜王山古墳・般若寺跡遺跡(六塚小学校地内)発掘調査概報』土浦市教育委員会.
- 22 設楽博己 1981 「根本古墳」『筑波古代地域史の研究』筑波大学 59-83 頁.
- 23 設楽博己 1987 「常陸地域地方における方形周溝墓をめぐる」『比較考古学試論』雄山閣出版 191-238 頁.
- 24 茨城県教育委員会 1971 『花室城跡発掘調査概報』.
- 25 土浦市遺跡調査会 1997 『三夜原東遺跡・新堀東遺跡・壺杯清水西遺跡』土浦市教育委員会.
- 26 財団法人茨城県教育財団 2000 『下郷古墳群』.
- 27 西谷津遺跡調査会 2003 『山川古墳群確認調査・西谷津遺跡・北西原遺跡(第 6 次調査)・神明遺跡(第 4 次調査)』土浦市教育委員会.
- 28 土浦市遺跡調査会 2004 『北西原遺跡(第 3 次・第 4 次調査) 山川古墳群(第 1 次調査)』土浦市教育委員会.
- 29 山川古墳群第二次調査会 2004 『山川古墳群(第 2 次調査)』土浦市教育委員会.
- 30 山川古墳群第三次調査会 2007 『山川古墳群(第 3 次調査)』土浦市教育委員会.
- 31 大賀 健ほか 2009 『赤弥堂遺跡(東地区)』土浦市教育委員会.
- 32 前田 潮 1981 「上坂田北部貝塚」『筑波古代地域史の研究』筑波大学 18-20 頁.
- 33 財団法人茨城県教育財団 1995 『原出口遺跡』.
- 34 新治村教育委員会 2001 『田宮梶の宮遺跡』.
- 35 明野町教育委員会 1983 『倉持遺跡』.
- 36 明野町教育委員会 1983 『倉持遺跡—第 1 年次調査—』.
- 37 明野町教育委員会 1984 『倉持遺跡—第 2 年次調査—』.
- 38 筑西市教育委員会 2011 『南台遺跡』.
- 39 財団法人茨城県教育財団 2004 『堂東遺跡』.
- 40 財団法人茨城県教育財団 2004 『戸崎中山遺跡』.
- 41 財団法人茨城県教育財団 1980 『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 I』.
- 42 伊東重敏 1994 『権現平古墳群調査報告』玉里村教育委員会.
- 43 古屋紀之 2006 「茨城県玉里村権現平 2 号墳の再検討」『玉里村立史料館報』Vol.11 玉里村立史料館 89-103 頁.
- 44 山武考古学研究所 1999 『山武考古学研究所年報』No.17.
- 45 土生朗治 2000 「茨城県石岡市上野遺跡出土壺形土器について」『山武考古学研究所年報』No.18 山武考古学研究所 59-68 頁.
- 46 財団法人茨城県教育財団 1983 『新池台遺跡』.
- 47 伊東重敏 1986 『後生車古墳群発掘調査報告書』石岡市教育委員会.
- 48 伊東重敏 1987 『後生車古墳群発掘調査報告書(第 2 次)』石岡市教育委員会.
- 49 伊東重敏 1994 『二子塚遺跡発掘調査概報』石岡市教育委員会.



- 50 井上義安 1976 『ひいがま』 I—III ひいがま遺跡発掘調査団事務所.
- 51 千種重樹 1980 『南藤太郎』大洗地区遺跡発掘調査会.
- 52 茨城町史編さん委員会 1987 『茨城町小堤貝塚』.
- 53 財団法人茨城県教育財団 2008 『中畑遺跡』.
- 54 財団法人茨城県教育財団 1998 『南小割遺跡, 権現堂遺跡, 親塚古墳, 後原遺跡』.
- 55 財団法人茨城県教育財団 2006 『新善光寺跡 穴戸城跡』.
- 56 稲田義弘 2007 「新善光寺跡に方形周溝墓が造られる頃」『考古学の深層: 瓦吹堅先生還暦記念論文集』  
瓦吹堅先生還暦記念論文集刊行会 185-194 頁.
- 57 佐藤次男 1989 「第二章 古墳と豪族と民衆」『常澄村史』常澄村教育委員会 97-126 頁.
- 58 佐々木憲一・田中 裕編 2010 『常陸の古墳群』六一書房.
- 59 伊東重敏 1974 「赤塚古墳群」『茨城県資料』考古資料編 古墳時代 茨城県史編さん原始古代支部  
会 54-60 頁.
- 60 財団法人茨城県教育財団 1981 『茨城県教育財団文化財調査報告 XI』.
- 61 水戸市教育委員会 1974 『向井原発掘調査報告書』.
- 62 財団法人茨城県教育財団 2001 『十万原遺跡 1』.
- 63 財団法人茨城県教育財団 2003 『二の沢 A 遺跡 二の沢 B 遺跡 (古墳群) ニガサワ古墳群』.
- 64 財団法人茨城県教育財団 1998 『三反田下高井遺跡』.
- 65 勝田市教育委員会 1969 『勝田市下高場遺跡調査予報 附・勝田市津田天神山遺跡調査報告追補』.
- 66 茂木雅博 1972 『常陸須和間遺跡』雄山閣出版.
- 67 岡村和子 1977 「d. 千葉県 g. 茨城県 (東関東地方)」『原史墓制研究』5 原史墓制研究会 59-76 頁.
- 68 佐藤次男 1972 「金井戸集落」『茨城県資料』考古資料編 古墳時代 茨城県史編さん原始古代支部会  
198-199 頁.
- 69 財団法人茨城県教育財団 1994 『山崎遺跡・滑川浜館遺跡』.
- 70 十王町教育委員会 1999 「十王台古墳群発掘調査の概要」『十王町民俗資料館紀要』8.

第1表 常陸地域の方形周溝墓集成表

No.	遺跡名	所在地	墓群構成	集帯との関係	遺構	時期	周溝		主体部					副葬品					備考	資料文献			
							形態	内法 (m)	墳丘部	周溝	瓦蓋	穿蓋	礎石	土	瓦	土	石	土			土	土	土
1	後九郎兵衛遺跡	稲敷市	II a		1号 2号 3号		方	10.13 × 8.25														1	
2	梅の台遺跡	美浦村	I	②?	1?	方 a	4.87 × 4.46	?	1														2
3	根本遺跡				方 c	7.6 × 6.6																	
4	廻り地入遺跡	龍ヶ崎市	II a	③	1号 2号 3号 4号	2?	方 a	4.48 × 4.90															4
5	北今城遺跡	守谷市	I	①	1号	2	方 a	3.90 × 3.90															5
6	回所瀬田遺跡	五霞町	I	③	1号	2	方 a	4.9 × 6.2															6
7	釈迦才仏遺跡	古河市	II a	③	2号 3号 4号 5号 6号	2?	方 h?	8.2 × (7.3)															7
8	栗原遺跡		II b	①	1号 2号 3号	1	方 a	6.00 × 10.00	5	4	9	2	1	1	1	1	1						8
9	源臺遺跡	牛久市	II a	③	1号 2号 3号 4号 5号 6号		方 c	10.5 × 10.5	?														9
10	実段寺子遺跡	阿見町	II a	①	1号 2号	3	方 a	4.23 × 4.22	1														10
11	泊崎城址				1号	1	方	4.78 × 4.73	1														11
12	塙松遺跡			①	1号	2	方	14.8 × ?	?														12
13	島名前野東遺跡	つくば市	II a	①	1号 2号 3号		方	6.8 × 6.5															13
14	島名ツバタ遺跡		方 a?	8.3 × 8.3																			
15	高須賀熊の山遺跡		II a	③	1号 2号	1	方	4.06 × 1.8															15

奇跡地域における方形周溝墓の基礎的分析

No.	遺跡名	所在地	墓群構成	集落との関係	遺構	時期	周溝		墳丘	主体部 方形台 内	遺物							備考	資料 文献							
							形態	内法 (m)			壙	壙	壙	壙	壙	壙	壙			壙	壙	壙	壙			
16	面野井古墳群	つくば市	Ⅱ a	③	1号	1	方	(7.68 × 6.62)						1	1						"勾玉、管玉33, ガラス玉6, 刀子, 不明鉄製品" 南関東系鉄鍔蓋	"16 17"				
					2号	1	方	11.87 × 10.22				1	1													
					3号	1	方	(2.85) × 5.33				3														
					4号	2	方	(1.58) × (15.54)				1														
17	六十日遺跡		Ⅱ b	①	13号墳	2	円	(15.54)	○?					1	1	1						18				
					1号	2	方 a	3.9 × 3.4																		
					2号	2	方	4.6 × (1.5)																		
					9号	2	方	11 × 11																		
18	北条中台遺跡		Ⅱ a	①	64号	2	方	9.5 × 9.3													19					
					3号墳	2?	方?	23?																		
19	五蔵遺跡																				20					
					1号		方	24 以上?																		
20	竜王山古墳群																				21					
					SX201		方 f?	8.01 × ?																		
21	穴塚遺跡																				22,23					
					SX202		方 f?	10.01 × 9.5																		
22	花盛城址		Ⅱ b		1号	3	方 a	11.0 × 10.1													24					
					1号	3	方 a	8.00 × (5.00)																		
23	袴杯清水西遺跡			③	第1号	3	方	(21.14) × (20.30)														25				
					8号	2	方 a?	10.02 × 8.96																		
					12号	2	方 c	9.52 × 7.65																		
					13号	2	方	(4.10) × (2.50)																		
					15号	2	方	15.75 × 13.50																		
					16号	2	方 a	10.35 × 8.97																		
					18号	3	方 a	(9.55) × 6.46																		
					19号	2	方	9.68 × 10.11																		
					20号	2	方 a	(7.53) × 7.40																		
					21号	3	方 b	12.13 × 10.23																		
					22号	2	方	(3.36) × (4.43)																		
					23号	2	方	(10.80) × 10.51																		
					24号	2	方 a?	10.51 × 9.07																		
					25	山川古墳群	土浦市	Ⅲ a	②	25号	3	方	(3.50) × (5.50)													
26号	3	方	4.83 × 4.73																							
27号	3	方 a?	13.34 × 11.75																							
28号	2	方 a	(3.91) × 9.38																							
29号	2	方 a?	(6.70) × (7.93)																							
30号	2	方 a?	6.0 × 5.6																							
31号	2	方 a?	11.5 × ?																							
32号	2	方 a	8.1 × 7.9																							
33号	2	方 a	?																							
34号	2	方?																								
26	赤弥堂遺跡				1号	2	方?														31					
					1号	2	方?																			

No.	遺跡名	所在地	基群構成	集落関係	遺構	時期	周溝		墳丘	主体部			遺物						備考	資料文献					
							形態	内法 (m)		前方部	後方部	内	穿	礎	礎	礎	礎	礎			礎	礎	礎	礎	礎
27	上坂田北部良塚				1号	1	方?	13.0 × 11.2		4	1	3								南関東系装飾蓋, 輪積之甕	23,32				
					1号		方a	8.30 × 7.15			1														
					2号	3	方a	9.50 × 7.90			5	3													
28	原出口遺跡	土浦市	II a	②	3号	3	方a	10.1 × 8.9		4										装飾器台	33				
					4号	3	方a	9.3 × 10.1			2	2													
					5号		方a	6.4 × 5.1																	
					6号		方a	7.2 × 7.4																	
					7号		方a	(6.2) × 6.3					2												
					8号		方a	5.6 × 6.3																	
					1号		方	(8.64) × ?					2												
					2号	3	方	(20.8 × 19.2)						2	1										
29	田宮権の菅遺跡		II a		3号		方b?	8.00 × (7.04)											ミニチュア土器 土製品	34					
					1号	2	方	10.90 × 10.30	?																
					2号	2	方	10.30 × (9.50)						1											
30	倉持中妻遺跡		II a		3号		方e?	11.0 × 12.0											"35,36, 37"	38					
					1号		円	9.0																	
					3号		円?	?																	
31	南台遺跡	筑西市	II a	①?	1号	2	方	14.4 × (12.0)												39					
					2号		方?	(3.0 × 1.8)																	
					3号		方	6.2 × 6.6																	
32	堂東遺跡		II a	①?	4号		方	5.6 × ?												40					
					5号	2	方g																		
					1号	2?	方a	7.72 × 7.73						1	1										
33	戸崎中山遺跡		I	①	円墳1号		円a	7.5											土玉	41					
					円墳2号		円a	13.60 × 11.04																	
					円墳3号		円	8.89 × (5.92)																	
					円墳6号	3?	円a?	4.8 × 4.3																	
					方墳1号	3	方a	15.15 × 16.06	?						4			13			1	1			
					方墳2号	2?	方a	12.0 × 8.00																	
34	志筑遺跡	かすみがうら市	II a	①	2号		方a	20 × 20.5	○										東海西部系加飾蓋, 東海西部系鉢	"42 43"					
					4号		方?	7前後																	
35	権現平遺跡	小美玉市	II a	③	1号	2	方?	18.8 × 19.2											"菅玉3, ガラス小玉"	44,45					
					2号		方	5.24 × 5.64																	
36	上野遺跡	石岡市	II b	③	3号		方a	2.60 × 3.90	?												46				
					4号		方a	8.58 × 8.66																	
					5号		方a	15.4 × 13.2																	

帝陸地域における方形周溝墓の基礎的分析

No.	遺跡名	所在地	墓群構成	係属上の関係	遺構	時期	周溝		主体部		遺物						備考	資料文献					
							形態	内法 (m)	墳丘	方台	周溝内	竪穴	壺	土器	小形埴	埴			板	付	器	品	
38	後生車遺跡	石岡市	II a	③	1号	3	方	7前後											"47 48"				
					2号古墳	3	方 a	14.5 × 12.4	○														
					2号	3	方	9.3 × 8.4															
39	二子塚遺跡	大洗町			3号	2?	方 a	10.2 × 9.6	○									49					
					1号		方 h	7.5 × 8.4															
40	髭釜遺跡	大洗町			2号		方 f	16.7 × 9.7										50					
					4号			(21.8 × 17.6)															
41	南藤太郎遺跡			①	1号		方	(17.5) × ?										51					
					2号			9.85 × ?															
42	小児貝塚				1号	2												52					
					1号	2	方 e	15.0 × 12.5															
43	中畑遺跡	茨城町	II a	①	2号	2?	方 e?	(4.5) × 12.2										53					
					(1号)			3.8 × 3.6															
44	南小御遺跡		I	①	2号?			4.9 × 4.9										54					
					1号	3	方 a?	13.20 × 13.60															
45	新善光寺遺跡	笠間市	II a		1号	2	方	11.2 × (10.2)										"55 56"					
					2号	2	方?																
46	塩崎原遺跡				(1号)		方 a?	4.8 × 4.5										57					
							円 a																
47	道西遺跡																	"57 58"					
48	赤塚遺跡	水戸市	III a	②	1		方 a?	12.0 × 10.0										59					
					2	3	方 a	9.0 × 10.0															
					3		方 a?	9.0 × 8.0															
					18		方 a	9.0 × 7.0															
					19		方 a	8.0 × 8.0															
					20		方 a	8.0 × 8.0															
					21		方 a	6.0 × 6.0															
					22		方 a	6.0 × 6.0															
					23		方 a	11.0 × 9.0															
					26		方 a	8.0 × 8.0															
49	大塚新地遺跡		I	①	27		方 c	8.0 × 8.0										60					
					28		方 a?	9.0 × ?															
					29		方 a?	8.0 × ?															
					30		円 a																
					1号	2	方 a	9.25 × 8.20															

No.	遺跡名	所在地	遺跡構成	集落との関係	遺構	時期	周溝		主体部	遺物							備考	資料 文献				
							形態	内法 (m)		方	原	器	高	小	環	埴			土	台	付	壺
50	向井原遺跡	水戸市	II b	①	1号		方 a													61		
					2号		方 a															
					3号		方 a															
					4号		方 a															
					5号		方 a															
51	十万原遺跡		I	①	1号	2	方 a	5.24 × 5.12	8	10	5	2	1	7	4				62			
					3号		方 a	11.4														
52	二の沢B遺跡		II b	①	5号		方	(12.2 × 8.2)											63			
					1号		方	4.20 × 10.8	1													
53	三反田下高井遺跡	ひたちなか市	II a	②	2号	2	方 a?	7.70 × 9.24											64			
					3号	2	方 a	8.10 × 9.02	?													
					4号	2	方 a	5.60 × 6.54	2													
							方 a	9.36 × 9.68														
54	津田天神山遺跡		II ?	II ?			方	10.5 × 11.8	?									65				
					2号		方	11 × 6	?													
55	下高湯遺跡				5号		方	10.15 × 7	?										65			
					6号	3	方	11.3 × 7.6	?													
					8号	3	方 a	7 × 8	?													
					10号	3	方	12.9 × 7.4	?													
					11号	3	方	(16 × 13)	?													
							方															
56	須和間遺跡	東海村	II a	③	1号														66			
					1号																	
					1号																	
57	小野崎城址	常陸太田市	I	①														67				
					1号																	
58	金井戸遺跡		II a	③														68				
					1号																	
59	清川浜館遺跡	日立市	II a	③	2号	3	方 d	10.10 × 10.10											69			
					3号	3	方	?														
							方 a															
60	十王台古墳群																	70				

1) 遺物欄の数字は最小個体数を示す  
2) 「券壺」は「底部券孔壺」を示す

## The Basic Analysis of the Square-shaped Moated Burial Precinct with the Ditch in Hitachi Region

Although square-shaped moated burial precinct with the ditch can be seen from Yayoi through the early Kofun periods, it has been pointed out that in the Hitachi region such kind of a grave system does not go back to the Yayoi period. Research concerning the emergence and development of square-shaped moated burial precinct with the ditch in Hitachi region has been stagnant from the first half of the 1990's, and although the newly detected square-shaped moated burial precinct with the ditch increased in numbers, the research and/or compilation has not been done for nearly 20 years. In this paper, I have therefore, compiled, analyzed the assembly and the basic information of the square-shaped moated burial precinct with the ditch in Hitachi region, and reconsidered their emergence and development. As a result, I have checked 176 moated burial precinct with the ditch from 60 archaeological sites in the current Ibaraki prefecture, which is over 100 moated burials more than at the compilation in 1993. In the analysis of the basic information of the square-shaped moated burial precinct with the ditch, I was able to confirm the research achievements of the 1990's. In other words, square-shaped moated burial precinct with the ditch of the Hitachi region, first emerged in the Kofun period, along with the South Kanto-type decorated jars in the southern part of Hitachi region, and then continued to expand to its northern part. In addition, from excavated pottery, mound structures, and the burial facilities, I concluded that the former was in connection with Simousa region, while the later somehow coincide with Tokai region and the appearance of the tumuli (kofun). Lastly, according to the distribution and locations, I estimated that the transmission routes of both were different.